2003 年度農村計画委員会秋季学術研究会「エコミュージアムと地域づくり」資料集、日本建築学会、2003.10、pp.51-54

エコミュージアム概念の誤解を解く

Beyond the confused state of Ecomuseum concept in Japan

大原一興

横浜国立大学大学院工学研究院，助教授，工学博士（ohara@arc.ynu.ac.jp）
Yokohama National University, Associate Professor, Dr. Eng.

要約

日本においてはエコミュージアムに対して未だ多くの誤解が蔓延している状況のように思われる。エコミュージアムは本来、自由な形態を持ち、地域の特性に応じて様々なすがたを見せるものなのだが、それを無理にひとつの型やモデルにはめようとすることから、様々な誤解が生じている。コアーサテライト関係という階層性やディスカバリートレイルなど、手法と形態のモデル確立を急ぎすぎて、地域ごとの特性に応じた展開を束縛している面が見られる。農村環境においては田園空間博物館の事業と混同されることもある。今後も、自由と工夫に満ちたエコミュージアムの実践が国内で展開され、さらに多くの議論を巻き起こし、より本質的な向上と発展につながることを期待したい。

エコミュージアム，地域遺産
ecomuseum, local heritage site

１．はじめに

わが国にはエコミュージアムの概念が導入されてからまだ日が浅く、導入にあたっては限られた情報しか無かったため、残念ながらエコミュージアムに対しては未だ多くの誤解が蔓延している混乱した状況のように思われる。エコミュージアムは本来、自由な形態を持ち、地域の特性に応じて様々なすがたを見せるものなのだが、それを無理にひとつの型やモデルにはめようとすることから、様々な誤解が生じているように感じられる。環境づくりに携わる立場からすると、このことは土地の個性を否定し思考停止を導いてしまう重大な過ちのように思われる。

現在感じられる誤解のうち、そのいくつかをここでは紹介し、通説的に語られ誤った解釈を与えられてきたことを正すことによって、本質的にエコミュージアムが求めていく方向の有効性やそのすばらしさを改めて確認してみたいと思う。

２．コアーサテライトという誤解

エコミュージアムに関する誤解として、もっとも普及している誤解は、その形態あるいは構造に関するものであろう。すなわち、3 点セットの構造、「コア・ミュージアム（コア施設）」「サテライト・ミュージアム」「ディスカバリートレイル」がエコミュージアムの必須条件であるかのような定説である。しかし、これは、むしろ日本のオリジナル用語である。日本のエコミュージアム第一号である山形県朝日町において採用されたひとつの形態モデルが、あたかもエコミュージアムの確立した形態であるかのように知れ渡っているようである。

国際的にはエコミュージアムの形態を示す定義は無く、このような規定はなされていないばかりでなく、用語の使い方についても国や地域によってやや異なっているように思われる（文－１など参照）。一部のエコミュージアムでは、この形態に類似したものはあるし、もちろん、この構造を採用するエコミュージアムがあってもよいが、決して必須条件でも定義でもない。この誤解は、地域特性を考慮せず全国一律で形式先行型のエコミュージアムを粗製乱造するおそれをはらんでいる点で、むしろ問題とさえなる。

まず、「コア」と「サテライト」という 2 つの言葉のセットは、明らかに、上下関係を表象している点が問題であるといえよう。海外の文献ではコアやサテライトという言葉にはめったにお目にかからない。口語では通じやすい言葉ではあるが、むしろ最近では視察に訪れる日本人に合わせて使っているむきもあるように感じられる。フランスではもともとはいわゆる「コア」と「サテライト」を、それぞれ「本部 chef lieu」と「アンテナ antenne」などと称しているのが通例であった（例えば文ー2 などの記述）。アンテナは実際にはフランスでもシット site などと呼ばれることもある。アンテナという言葉は、仏語圏以外ではアンテナとは呼ばれることはめったになく、英語表現でもっとも通用するのはサイト site という言葉である。（後述、表１参照）

文ー3 の中では、「本部」という存在の重要性があえて強調されているが、これは、単に点在するアンテナをそれぞれ独自に運営するのではなく、ネットワークとしてまとめ、全体に責任をもつエコミュージアムの組織が必要という理由でとりあげられたものである。つまり、点在するアンテナの地図をつくるだけの観光マップのようなものはすぐに作成できるが、それはエコミュージアムとは言えず、全体をつなぐ役割のミュージアム活動を担う組織の存在する必要性があり、それを本部と呼び、こ

れはエコミュージアムの必須条件となる。

しかし、この本部は、ネットワークのための組織であり、それが地域のアンテナを統括する役割として上位に立つものである必要はない。実際、設立当初は、本部の強力な指導力のもとに各アンテナが活動していたエコミュージアム（ル・クルゾ・モンソ・レミーヌ）で、近年では、それぞれのアンテナの独立運営を尊重した対等なかたちの協約形式に変えたところもある。そこではもはやアンテナという言葉は使っていない。シット site あるいはそれぞれを固有名詞のミュゼと呼んでいる。このように、まず、コアとサテライトという言葉をセットで使うことは、海外では全く意図されていない。上下関係を持っては本来のエコミュージアムの理念から離れるばかりである。

さらに「コア施設」や「コア・ミュージアム」というように、コアの機能に物理的な意味を持たせる用語が、また大きな誤解のもとになる。前述したように、「本部」の必要性は、組織としての自律性にあり、決してそれは建物を意味するものではない。現実的に、本部に展示機能をおかずに、事務所機能だけにしているものや、公的な建物の一室を借りているところなど、必ずしも本部にはミュージアムとしての建物が必要なわけではない。もちろん本部の拠点施設はあるにこしたことはない。しかし、このミュージアム建物の建設先行性が逆にエコミュージアムの健全な活動の発展を束縛することにもなりかねない。建物を設置すると当然ながらそこに人員配置が固定化し、本来地域で活動することの重視されるべきエコミュージアム活動がハコモノに閉ざされることになり、それはエコミュージアムにとって致命的な欠点となる。

サテライトに関する各国の用語の使い方については、各地のサイトの呼び名を、表１に示してみた。文―４でも述べたように、実に様々（サイト、環境、部門、訪問地点、訪問対象 etc.）であり、特に英語表現では、その場所としての site（サイト）と呼ぶのが一般的であると思われる。これには、見所としての sight の意味も込めてサイトと呼んでいるところもあるようである。中には、日本のコアにあたる言葉でサイトを「ヌクレオ（核）」と呼んでいるところもある。これは点在する複数の地点のことを呼んでいるものであり、分散した核が地域に多数あるという概念である。コアーサテライトという関係性・階層性は無い。日本で意識されやすい中央集権的統括モデルとはほど遠い概念である。

このようなサイト間の関係については、多くのエコミュージアム研究者が序列性を感じさせる言葉は好ましくないと語ってくれたが、基本は、その国の言葉で、良い言葉を探すことだという共通した意見を得ている。（P.Davis, T.Dahl, J.A.Gjestrum, Hugues de Varine, P.Mayrand 他）

サテライトという言葉には、前述したように、何かの従属物になるという意味がつきまとってしまう点が大きな問題であると言える。日本へのエコミュージアムの紹介者で、このコアーサテライトモデルの発案者でもある新井重三は、「*一方、遺産のことは別名、サテライトという言葉を使っていますが、そのサテライトについては、いろいろな意見があります。サテライトという言葉は非常に誤解を受けやすいという意見もあります。コアがあってサテライトというのは、地球における月みたいなものですから、コアが中心であって、サテライトは付属品というふうに受け取られやすい。ところが、実際は、エコミュージアムではむしろサテライトの方が大事なのです。コアは後で作った便宜的なものですから。・・中略・・情報を集めて、それを中央のコアに送ってくれる、また発信・受信をする、その基地が、我々がサテライト（衛星）と言っているものなのです。サテライトという言葉には問題もありますが。今のところ、私はサテライトという言葉を使っています*」と、その問題点を意識しつつ使用することを述べている（『第三世界の地域開発とエコミュージアム』、ヒマラヤ保全協会、1997.3、所収の鼎談「エコミュージアムの可能性と課題」p.50）。この点が理解されないまま、サテライトという言葉が一人歩きし、あたかもそれが標準か必須条件の用語のように使用されることは、今後のエコミュージアムの自由な展開や発想をはなはだしく狭めてしまうに違いない。

３．ディスカバリートレイルの誤解

3 つめの要素、ディスカバリートレイルについては、これが、各サテライト間をつなげる道というように誤解されて使われ、しかも田園空間整備事業ではこれが、徒歩による散策路「フットパス」と位置づけられている。これは日本だけの特色である。しかし、海外のエコミュージアムには、東京都よりも広い面積をもつものさえあり、そこを結ぶ経路をあらかじめ指定して整備することは事実上ナンセンスなこととなる。サイト間の移動には多くは公道を利用するのであり、それに応じて交通手段を各自が調達しているのが、海外のエコミュージアムの実状である。効率よくサイトをまわろうという考え方は、日本の観光業的発想にすぎないのではないだろうか。事実、そこに住んでいる住民にとっては、一度にすべてをまわる必要はなく、毎月のように何度となくいろいろなサイトを訪問することのほうが、日常的な学習に適合した利用の仕方である。

このディスカバリートレイルというものも決して必須条件ではなく、フランスなどで設置されているものは、あるテーマをもっており、（例えば、古式農法の農場環境を巡るもの、中世建物を見て回るためのものなど）、そのトレイル全体をひとつのアンテナとして位置づけている。つまり、アンテナ間をつなぐものではなく、トレイルそのものがひとつのサイトとなるのである。パネル展示場や実演展示などと同様、アンテナの展示方法のひとつである。このような場合は、おおむね徒歩で散策するような小径であることが多い。

４．エコミュージアムと観光経済についての誤解

しばしば日本ではエコミュージアムが商業主義的な観光事業として考えられることがあり、これは大きな誤解のひとつである。基本的にエコミュージアムは地域住民の内発的発展のためにあるもので、外部からの観光客に対して迎合することは本末転倒となる。もちろん観光地において、その地域の主要産業が観光である場合には、観光を無視することはできないが、外部からの観光客による収入を目的とした集客施設としての博物館の設置は、エコミュージアムの目的とは根本的に異なる。エコミュージアムの役割は、観光を通じて地域住民が自分の地域に誇りを持ち自らの地域の遺産を大事にし地域を育てている意欲を高めることによって、意識を活性化することである。この場合の活性化は単純な経済的活性化だけを意味するのではない。

たしかに、ヘリテイジツーリスム、カルチュラルツーリスム、エコツーリスム、持続可能な観光などと呼ばれるものと、エコミュージアムとは、共通した考えをもつところがあると言える。これらの概念は、みな基本的に日本で多くみられる商業的・収奪的な観光形態とは異なっている。少なくとも、観光の名の下に自然や地域文化を切り売りし、その収益によって一時的な地域経済の活性化をおこなうことを主目的とはしていないのである。

マッギら（文－5）は、エコミュージアムの周辺で見うけられる商業的な観光産業を、異常な短絡的観光主義（hetero-direct tourism）として、危険視している。イタリアの多くのエコミュージアムで試みられている観光地化の実態を全く否定するわけではないが、あくまでも、長期モデルにおける目標が必要なのであって、観光収入による地域経済は短期的な戦略にすぎないことを忘れてはならない、という彼の主張は、日本にもそのまま当てはまるものと言えよう。

５．田園空間博物館とエコミュージアム

農林水産省の一事業である「田園空間博物館」事業イコール日本版「エコミュージアム」、という誤解もあるようだ。たしかに「田園空間博物館」は、田園の自然環境や景観、伝統文化を保全するミュージアムとして発想されたもので、主にフランスのエコミュゼをモデルにしているように紹介されている。田園空間整備事業はそのために必要となる環境整備のための事業と位置づけられる。

田園空間博物館が日本版エコミュージアムとして通用するために十分な内容かどうか、ということも議論の対象にはなり得るが、問題は別にある。エコミュージアムは単なる形態ではなく活動であるという点、つまり、田園空間博物館事業はミュージアムの活動を担保するものではない、という点からしてふたつは別物と考えた方が良いのではないだろうか。田園空間博物館として物理的に整備された地域が、地域社会における活動としてのエコミュージアムになるかどうか、という問いはその後の問題である。

従って、田園空間事業による「田園空間博物館」整備は、エコミュージアムになりうるかどうかという問いに答えるならば、多くの場合、必要条件にはなるが十分条件ではない、という言い方が適切であろう。エコミュージアムを進めていくための拠点が整備されることは、その活動にとって望ましいことには違いない。エコミュージアム活動の欲する物的整備が達成されるなら、それは大きな推進力になる。逆に、ただ形態が整備されても、活動と運営がなければ、それはミュージアムではない。エコミュージアムではむしろ、その物理的な形骸にとらわれないところにこそ、その特色がある。

注意すべき点は、整備が本来必要とする住民の意向に反した方向で行われては全く意味がないばかりでなく、むしろエコミュージアム推進にとって反動的な行動となることさえある。整備方針や保全方針が地域住民の参画によって決定され運営されていくことがないかぎり、それはエコミュージアムとはならない。また、整備作業が行政の独善によって、住民に全く関知されず進められるならば、できあがったものに対する住民の参加意識が無く愛着も薄れ、保全意識にも翳りが生じる。一部の業者による作業が住民にとって見えないブラックボックスになってはいけない。エコミュージアムにとって住民の参加が無いことは致命的なことである。エコミュージアムの実現は民主主義の実践と例えられることがよくあるが、それは、住民による住民のための住民のミュージアムと言えるものなのである。

このような田園空間博物館の今後の課題の詳細については、文－６で触れたが、項目だけを紹介すると、まず運営体制／組織の確立（全体を支援する本部組織と各サイトの組織）、そして、整備施設や地域遺産の維持管理への住民参加のシステムが必要となると言えよう。

６．おわりに

山形県朝日町におけるエコミュージアムの取り組みは、日本における先駆的な独自の試みとして、広く紹介され高く評価されるべきものであると思う。

しかし、全国一律にこの形態と方法が適用されることはない。朝日町の取り組みは、エコミュージアムの基本理念を共通なものとして持ちつつも、ここでしか成立しない固有の方法論であると考えた方が良い。なぜなら、エコミュージアムというものは、地域において既に前もってある資源を最大限活かしながらそれを発展させていくものであり、そのための手法は地域特性に応じて地域社会と住民が自ら編み出していくしかないのである。

精神を忘れて手法におぼれることから誤解が生じ、その誤解が広く普及してしまうという事態はエコミュージアム理念そのものを冒涜する行為としてぜひとも避けたいものである。先駆的な試みが制度や枠組みを形成する

時点で起きることのある不幸な事態が、エコミュージアムの普及に際しても、これまで本稿で述べてきたような誤解として現実のものになっている。

田園空間博物館がエコミュージアムとして実質的に展開するかどうかも、今後の活動の強化による実体化に拠っている。そのきっかけづくりとして、この田園空間博物館事業が、農村環境づくりの分野に一石を投じた意義は大きいと思われる。またこれらによって、誤解されることが依然として多いとしても、エコミュージアムに対する認識や関心は国内に広まってきたと言える。

その中で様々な議論が生まれ、これまでのハード整備主体のあり方からソフト重視に移行する必要性などが、わずかではあるが、各地で意識されつつあるように思われる。今後も、自由と工夫に満ちたエコミュージアムの実践が国内で展開され、さらに多くの議論を巻き起こし、より本質的な向上と発展につながることを期待したい。

文献

文－1）Davis，Peter： *Ecomuseums - a sense of place -*，Leicester University Press，1999

文－2）Lazier, Isabelle : 1987, fiches signalétiques des écomusées, pp. 141-181, in *Actes des Premieres Rencontres nationales des Ecomusees*, Agence Régionale d'Ethnologie Rhône-Alpes Ecomusée Nord-Dauphiné

文－3）de Varine－Bohan，Hugues： A 'fragmented' museum : the Museum of Man and lndustry，Le Creusot－Monceau－les－Mines, PP．242－249，*Museum*；25，4．1973

文－4）大原一興:「エコミュージアムにおけるサイトの呼び方」，P．25，農村環境整備センター発行『北欧の農村地域におけるエコミュージアム調査報告書』（平成 11 年）農村環境技術研究 No.46，2000.3 所収

文－5）Maggi, M. et al. : "The Future of Ecomuseum", *Preprint of Encontro Internacional de Ecomuseus*, II / ICOFOM LAM, IX, 2000, pp.92-97

文－6）大原一興：「田園空間博物館からエコミュージアムへ」、pp.16-21、No.18、農村と環境、(社)農村環境整備センター、2002.8

文－7）大原一興：『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会 1999

表１　エコミュージアムにおけるサイトの呼び方

エコミュージアム（国名）	現地語による サイトの呼び方	日本語の意味	英語版パンフレット等での記述
フランス・ベルギー一般（註１）	Antenne アンテナ	アンテナ	－
クルゾー・モンソ・レミーヌ（フランス）	かつて antenne、今は、固有名詞の musée とよぶ	アンテナ、今は固有名のついた博物館	Site（文献では element）
フルミ・トレロン（フランス）	Site シット	サイト（英：site）	Site
バスセーヌ（フランス）	Antenne アンテナ	アンテナ、サイト	Site
セイシャル（ポルトガル）	Nucleo	核	Site
ファルビグデン・エトラダーレン（スウェーデン）	Besöksmål ビソクスモール、または ekomiljö エコミリョ	訪問対象（英：visiting goal, visiting object）またはエコ環境（eco-environment）	Site
ネドレ・エトラダーレン（スウェーデン）	Besöksmål	訪問対象	英文パンフなし
ソホイランド（デンマーク）	Besøkscenter	訪問センター（英：visitor centre）	Visiting centre
ヴェストイランド（デンマーク）	Besøkssteder	訪問地（英：Visitor place）	英文パンフなし
サムソー（デンマーク）	Besøksplat ビソクスプラッツ	訪問地（英：visiting place）	英文パンフなし
ノルウェー一般（註２）	Avdeling アヴデーリン	部分、部門（英語で division, department ）	Antenna
トテン（ノルウェー）	Avdeling アヴデーリン	部分	なし（英語資料には antenna とある）
セルヴァランゲル（ノルウェー）	地図上では Severdighet、施設を示す時 Anlegg	サイト、見所、Anlegg は施設や構築物のこと	Sight
ノールトロムソ（ノルウェー）	Ankegg	施設、構築物	英語パンフなし
ベリスラーゲン（スウェーデン）	Miljö ミリョ	環境（英：environment, milieu）	Site
クリチャンスタッド（スウェーデン）	Besökspunkt ビソックスプンクト および utemuseum ウトミュージアム	訪問地点（英：visiting place, visiting point）および　屋外博物館	Site および outdoor museum
グレンスランド（スウェーデンとノルウェー）	Besöksmål および Kuturrum クルチュルム	訪問対象、および　文化の部屋（英：culture room）	英文パンフなし
朝日町（日本）ほか	サテライト	衛星（英：satellite）	なし

註１）ブレス・ブルギニョン、グロワ島、マルジェリッド、モン・ロゼール、ロアネ、等（フランス）、サントル、ヴィロワン（ベルギー）、　直接訪問して確認した他、Lazier, Isabelle : 1987, fiches signalétiques des écomusées, pp. 141-181, in *Actes des Premieres Rencontres nationales des Ecomusees*, Agence Régionale d'Ethnologie Rhône-Alpes Ecomusée Nord-Dauphiné 等の文献による

註２）Gjestrum, John Aage : 1988, Økomuseer i Norge, p.158-162, in Gjestrum/Maure: *Økomuseumsboka* による